

# 自慢旅行

karinomaki

## いじめ

---

私は精神病になり、親戚の家でいじめられて暮らしていました。とりわけきつかったのが、いとこたちと大きく差をつけられてあつかいが違ったことでした。

中でも、社会的成功者である、いとこの女の子Kちゃんのことには本当につらかったです。Kちゃんは東京の大学に行き、どんどんあかぬけていきました。精神病になって転落していく私を尻目に、美しく着飾り、資格をとり、立派な旦那さんと婚約しました。

私はそのとき、人生をあきらめてはいませんでした。しかし、哲学というものにまだ出会ってはいなくて、下手なピアノにしがみついていた。何かをしなければ、というあせりがありました。しかし、ピアノは私の道としてぴったりではありませんでした。才能がなかったのです。

## 見せつけ

---

そして何より、私は自分の外観に無頓着で、とてもださいかっこうをしていました。髪をうしろでたばね、田舎っぽいかっこうをしていました。そんな私にも、自尊心はありました。自分はちゃんとした、考える人間だという自尊心です。私は必死でピアノを練習しました。そんな私を容赦なくむち打ったのが、Kちゃんの、自分の美しさと才能の見せつけでした。Kちゃんは、さかんに父親に自分の仕事自慢をしました。そして、ビジネス書を出版しました。そして、悪夢のような旅行が始まりました。

## 自慢旅行

---

私達は、家族で鳴門の親戚の家をいくつか訪問しました。それは、Kちゃん中心の旅行でした。どの家に行っても、Kちゃんがビジネス書を出した自慢が繰り広げられます。私はみんなにほめられるKちゃんをひきたてる醜い引き立て役として連れていかれたのかもしれませんが。私は預けられた親戚の家で女中のようにこきつかわれて一日750円で暮らしていましたから。一度だけ、私がピアノが得意なことを、かわいそうに思っただけのことか、言ってくれた優しいおばさんがいました。 . . .

## とどめ

---

そして、私をぼろぼろにするとどめの出来事がありました。親戚の中に、皮膚科の部長をしているおじさんがいて、そこでもKちゃんがアトピー体質であることが中心の話題でした。たしか、そのおばさんが、うちには使っていないピアノがあるんだけど弾いてみる？と言ってくれたんだと思います。私はピアノの前に座り、モーツァルトのピアノ協奏曲23番を弾きました。私が最も得意な曲でした。すらすらと弾け、何よりも音がよく、私はとても気持ちよく、これまでで最高の仕上がりに弾けました。何か、開放感がありました。それは、私のずっと抑圧され続けた自己顕示欲だったのかもしれませんが。私は帰り道につぶやきました。「あのピアノすごく音がよかった。また弾きに行かせてもらいたいな・・・。」するとKちゃんがすかさず言ったのです。たぶんKちゃんは、家に響き渡るピアノをおじさん、おばさんがほめているのを苦々しく聞いていたのでしょう。

「相手の都合も考えたら？家に上がらせてもらってまで弾くのだからあなたが勝手に決めたら失礼だとは思わない？」

Kちゃんにはそういうところがありました。おさない頃、ピアノもバイオリンも勉強も私がKちゃんを大きくリードしていました。そのころの仕返しをKちゃんは転落した私にし続けているのですよね。それが、その言葉で私にははっきりわかったのです。

## 醜い仕返し

---

私の屈辱にまみれた、Kちゃんの自慢旅行はやっと終わりました。

そのあと、私には救世主が現れました。ひとくせもふたくせもある、個性的な人ですが、母の彼氏です。いや、内縁の夫です。私には、お金がたくさんあり、不動産会社もたくさんありましたが、このおじさんは、母を説得して私を親戚の家から救いだしてくれ、合同会社を作り、私を代表にしてくれました。

私は、ここぞとばかりに、Kちゃんにラインでそのことを伝えて、Kちゃんの物の考え方、生き方を大きく批判しました。

Kちゃんのような人間は、社会が認める生き方をすれば、みんながほめてくれる生き方をすれば、それで幸せなのです。一方の私は、電子書籍をいくつ書いても、それで自分が世の中に出ることなど、考えていません。隠れて生きていきたいです。少数の人が、私の深くなった思想に共感してくれればそれでいいのです。

本当に偉い人は、「認められる」ために努力するのではなく、それが好きだから努力するのです。Kちゃんにひどいラインをしましたが、私のささやかな復讐でした。私はKちゃんのような人がたくさんいる社会と戦っていきたいから……。Kちゃんへのラインはその宣戦布告のようなものでした。

どんなに地味でも、輝いて生きていきたい。毎日を充実させたい。その先には必ず大きな、本当の栄光があるから。それは、Kちゃんが逆立ちしてもつかめない栄光です。